

出会い（1）

禅との幸いな出会い

キリスト教との不幸な出会い

奥村 一郎

1. 禅との幸いな出会い

そのころ、誰がすすめてくれたのか覚えていない。ともかく、今に劣らぬ激しい受験競争の修羅場を乗り越えて、昭和18年4月、旧制一高に入学、早々に手にした本が、当時、一高校長から抜擢されて文部大臣をしておられた橋田邦彦先生の著書、『正法眼蔵釈意』2巻であった。それが日本曹洞宗の開祖、道元禪師（1200～1253）に出会うきっかけとなった。

若さの気負いと大目にみられてよいのかもしれないが、多読乱読を競う風潮のなかで、旺盛な知識欲を道元の大著『正法眼蔵』一本に集中していったことは私にとってひとつの救いになったともいえる。とくに、開巻第一章の「現成公案」は、初期にものされた（道元33歳）、比較的短いものではあるが、なお若かりし日の私の求道の魂を魅了するに十分であった。

仏道、もとより豊儉より躁出せるゆゑに生滅あり、迷悟あり、生仏あり。

しかもかくのごとくなりといへども、
華は愛惜にちり、草は棄嫌におふるのみなり。……………

仏道をならふとは、自己をならふ也。

自己をならふとは、自己をわするるなり。

自己をわするるといふは、万法に証せらるるなり。

万法に証せらるるといふは、自己の身心および他己の身心をして脱落せしむるなり。

悟迹の休歇なるあり、休歇なる悟迹を長々出ならしむ。

「曠古の大文章」と絶賛する現代詩人大岡信の、たぐいなき愛読書でもあった、『正法眼蔵』との出会いは、以前、フランスの国境からアルプスの大連峯をはじめ眺めたときの感動にも似たものがあった。

ところで、その間、一高から東大卒業後、まもなく出家、三島の竜沢寺の雲水修行に入り、山本玄蔵老師に師事された中川宋淵禪師が毎月13日、後輩指導のため坐禅を主とする小接心の機会を



奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年、東京大学法学部政治学科卒業。48年、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりパチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書に、『断想』『主とともに』『友の祈り』（女子パウロ会）、『わたしの心よ、どこに』（サンパウロ）、『聖書深読法の生いたち』（オリエンズ宗教研究所）など多数。

与えてくださっていた。駒場キャンパスの奥にあった、「三昧堂」と名づけられた禅堂では今も定期的に坐禅の集いがあると聞いている。脛からはだしの足に厚い朴齒の下駄をはいて、「弥生道」の名で親しまれていた銀杏並木を三昧堂に向かう青年僧宋淵禪師の一分の隙もない、しかも、しずかなぬくもりさえも感じさせる、爽やかな後ろ姿は今も眼前に浮かぶ。「不立文字、以心伝心」（悟りは文字、言説をもって伝えるものではなく、心から心に伝わるもの）の悟境が、しかと響いてくるような思いがした。

精神的揺籃期ともいえる、その若き時代に、私にとって三つ子の魂ともいえるものになったのは、まさしく、道元の「無所悟、無所得、只管打坐」（悟ることなく、得ることなく、ただひたすら打ち坐る）の禅心であり、その曹洞禅の心を、修行の実際指導を通してはぐくんでくださったのが、臨済宗の師家、宋淵老師であった。

2. 聖書との不幸な出会い

一高時代に所属していた学科は、「文乙」とか、「文四」ともいわれた、ドイツ語専攻の学科であった。そのため、当時の日本の社会や学会での主流となっていた、ドイツの哲学や文学に接することが多く、また、その他の欧米思想についての知識を通じて感じとられてきたものは、西欧文化の根底にあるキリスト教の重みであった。そこで、キリスト教を知るためにはとりあえず、『聖書』から始めねばと思い、渋谷の道玄坂に出かけ、小さな古本屋でお粗末な青い表紙にザラ紙の聖書を購入した。どの本にしても、最初の1ページから読み始めるのはあたりまえ。ところが、そのあたりまえのことが、とんでもないことになってしまった。

「マタイによる福音書 イエス・キリストの系図」という小見出しで、次から次へと、舌ももつれるようなヘブライ語の名前が、たてつ

づけにでてくる(マタイ1:1~17)。

次には、「イエス・キリストの誕生」の次第が述べられる。まず、マリアの処女懐胎、それにつまづくヨセフの話。すると、ヨセフは夢の中で天使の荘厳な予言成就のお告げを受けて、マリアを妻として受け入れることを決意する……………(マタイ1:18~25)。第二章に入ると、その幼な子イエスを訪ねて礼拝するために、3人の占星術の学者が、黄金、乳香、没薬の贈りものをもって、はるばる東方の国からやってくる。それも、星に導かれて、まずエルサレムにくる。そこで当時の悪王ヘロデに幼な子の居場所を尋ねると、王は驚きおそれて、祭司長や律法学者たちを集めて急遽会議を開く。そこで、旧約に預言されたベツレヘムであることがわかり、3人の学者たちは出かけて目的を果たす。このときも、また、同じ東方の星が先だって進み、幼な子のいるところでピシャと止まった(マタイ2:1~12)。そのあとは、天使がまた、ヨセフの夢に現れて、幼な子を皆殺しにしようとしているヘロデの魔手を逃れるため、幼な子イエスとマリアを連れてエジプトに避難するよう勧める。その後、ヘロデが死ぬと、ヨセフは前のように、夢の中の天使のお告げで、エジプトを出て故郷のナザレに帰り、そこに住むことになったという。これがマタイの一章から二章の福音記事のあらましである。

当時のわたしにとっては全くチンプンカンプンのイエスの系図、つづく、処女懐胎やそれにまつわるヨセフの夢物語、という荒唐無稽な信心物語。そんなところへ、どこからかひょいと星ができて旅人を導いたなどという児童劇、全く幻滅もいいところ、人生とは何か?というような究極の課題などとはおよそ縁もゆかりもないバカげたものとしか思えなかった。

「じんかいかくじん 尽界客塵無し。じきげ 直下第二人あらず」(微塵の汚れもない無限の大宇宙、自己の足下に、ひとひとりなし)(『正法眼蔵』「仏性」)

こうした、現代科学も及ばぬ、透徹しきった虚空に大輪の華咲くがごとき、宗教的宇宙遊泳にも似た、まことに自由無碍の道元むげにみる禅の世界に比して、聖書物語は余りにも貧弱な稚拙きわま

カリカチュアる宗教戯画でしかなかった。

それまでに、文学や哲学書などを通して、「山上の垂訓」とくに、その真幅八端のことや隣人愛を越える愛敵の教え、岩波書店の商標になっている「種蒔きのたとえ」、さらに十字架と復活の物語など、おおづかみではあるが光となる福音書の知識は、キリスト教への私の関心を支えてくれていただけでなく、片山敏彦とか、三谷隆正のような、深いキリスト教信仰に生きておられた良き師に学ぶ貴重な体験もあった。にもかかわらず、聖書との直接の出会いはいはじめそのものであった。「出会い」というよりは、まさしく出会いがしらの激突事故に終わった。

「少年老い易く、学成り難し」「光陰矢の如し、時人を待たず」とはそのころよく聞いた諺である。人生の大問題に何の答えにもならない聖書、その聖書を信条とするキリスト教なぞに、貴重な時間をムダに費やしてはおれない。みじめなまでに期待を裏切られた聖書は、もう永遠に無縁なものとして、その時、私の手から離れ去っていった。

それから一年たらずして、日増しに悪化する第二次世界大戦の危機に対処すべく学徒出陣の至上命令がくだった。昭和18年12月1日、名古屋の「中部第13部隊」に入営するときに携帯した本は2冊だけ。道元の『正法眼蔵』(七十五帖本 大日本文庫刊行 昭和17年)と、ニーチェの『ツアラトウストラ』であった。

「馬鹿野郎! こんなものが戦争に役立つか?!」と大喝一声、物品検査兵にビンタをくらわされそうになって、本はただちに没収されてしまった。(つづく)